慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『〔寛政七年吉田道可銀閣寺茶会記〕』翻印と解題
Sub Title	The record of the tea ceremony held by Yoshida Doka at Ginkaku-ji Temple in 1795 : a transcription and bibliographical notes
Author	一戸, 渉(Ichinohe, Wataru)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2024
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.58 (2023.) ,p.159- 207
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20230000-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『〔寛政七年吉田道可銀閣寺茶会記〕』翻印と解題

一戸　渉

はじめに

摂津国菟原郡住吉村呉田（現在の兵庫県神戸市東灘区阪神住吉駅の南）の豪商吉田道可（一七三四～一八〇二）は、酒造業や廻船業、大名貸など幅ひろい商いで財を成すかたわら、文芸・茶・書・書画や器物の蒐集などといった風雅のいとなみに大いに入れこんだ。

瀬戸内の海を一望する月波楼、あるいは聆涛閣などとよばれた吉田家の邸宅には、道可からその次々代の敏（一八〇二～六九）の時期にかけてあまたの文人墨客が招かれ、その見事な景観とともに、同家の所蔵する書物や書画、古器物などを併せて鑑賞しつつ、主人からのもてなしを受けていたようである。[1]吉田家の旧蔵品として今日知られているものには弘仁鈔本『文館詞林』巻第四五五残簡（天理大学附属天理図書館現蔵）や『王勃集』巻二十九断簡（個人蔵）といった佚存書の類も少なからず含まれており、書誌学史上においても吉田家は看過できない存在といえる。

吉田家については近時、国立歴史民俗博物館において大規模な展覧会が催され、とりわけ好古家としての側面に関して急速に実態解明が進みつつある。[2]論者自身も当該展覧会の企画並びにその前段階として行われた共同研究「『聆涛閣集古帖』の総

合資料学的研究」（二〇一七～一九年）に参加しており、吉田家の学芸及び出版上の事跡の全体像に関しては別途論じる予定である。[3]

さて、上記した展覧会の会期がはじまって間もなく、論者の同僚である堀川貴司氏に展覧会図録をお渡ししたところ、堀川氏が数年前に古書肆から入手したある茶会記を見せていただくこととなった。展示には寛政七年および同八年に吉田道可が開催した銀閣寺こと東山慈照寺での茶会に関して、秋里籬島『都林泉名勝図会』（寛政十一年刊）などに基づいて紹介するコーナーがあり、論者が解説等も担当していたのだが、その箇所をご覧になった堀川氏が、ご自身の所蔵する茶会記はあるいはこの道可が主催した銀閣寺茶会の記録ではないか、と思い至ったのだという。後述するように、堀川氏の予想通り当該資料は寛政七年（一七九五）の道可主催の銀閣寺茶会の記録と見て相違なく、このたびここに紹介する運びとなった。

所蔵者である堀川貴司氏からは当該資料の存在をお教えいただき、翻印紹介をご許可下さったばかりでなく、翻字の誤りや人物比定についても種々ご教示を賜った。冒頭に記して深謝申し上げる次第である。

《解題》

本資料は以下の四冊から成る。まずはそれぞれの書誌を略記する。

①寛政七卯年五月洛東於銀閣茶湯来客日記

写本。長帳綴。一冊。共紙表紙（縦一二・一×横三二・四糎）。楮紙。外題「寛政七卯年五月洛東於／銀閣茶湯／来客日記」。表紙墨書「月波樓主人」。寛政七年五月九日から同年六月二日までに催された茶会二十四席（うち五月十六日及び同十七日は朝に開催）の出席者の記録。

②乙卯暮秋東山茶燕来賓録

写本。長帳綴。一冊。共紙表紙（縦一二・〇×横三二・六糎）。楮紙。外題「乙卯暮秋東山茶燕来賓録」。表紙墨書「樫川老人」。寛政七年九月二十一日から同年十一月二日までに催された茶会三十七席（うち十月十日、同月十一日、十一月二日は朝に開催）の出席者の記録。

③留京会茶期

写本。長帳綴。一冊。共紙表紙（縦一一・九×横三四・一糎）。

『〔寛政七年吉田道可銀閣寺茶会記〕』各冊表紙

楮紙。外題「留京会茶期」。表紙墨書「北渚」。寛政七年十一月三日から同年同月二十四日までに催された茶会十二席の出席者の記録。

④寛政乙卯夏五月東山茶燕迎賓稿

写本。長帳綴。一冊。共紙表紙（縦一一・七×横三三・四糎）。楮紙。外題「寛政乙卯夏五月／東山茶燕迎賓稿」。裏表紙墨書「樫川居士」。①の期間の茶会出席者等の名簿と思しきもの（日付なし）。

右の四冊はいずれも同筆。吉田道可の筆跡として確実な資料は乏しく、いまのところ住吉歴史資料館の所蔵する「歳旦夢中句」一幅が唯一のものである。[4] そちらとはやや書きぶりが異なるものの運筆に通い合う部分も認められ、また道可は大炊御門家孝を通じて大師流の書を学んでいるが（墓碑銘参照）[5]、外題や署名の一部に大師流の気味が僅かながら認められる。

加えて、本資料に見える各種署名はどれも道可が用いた号と一致している。まず①に見える「月波樓主人」は、白河藩士広瀬蒙斎の漢文紀行『有方録』寛政九年二月八日条の呉田吉田家訪問時の記事中に「門右有月波樓」とあり、[6] また本資料にも登場する橘七郎右衛門こと橘泰の考証随筆『筆のすさび』（文化

三年・一八〇六刊）にも道可の邸宅について「別園に月波楼を高く築き、楼上より南海あらん涯を遠望し」云々とある。②に見える「樫川老人」及び④の「樫川居士」に関しては先述した「歳旦夢中句」の署名に「樫川隠居道可」とあり、さらに③の「北渚」号は道可の墓碑銘にも刻されているものである。以上を総合するに、本資料は寛政七年に吉田道可の手で筆記されたものと見てよいだろう。

いまこれらの資料を一括して『〔寛政七年吉田道可銀閣寺茶会記〕』と仮題する。各冊に冊次の記載はないが、茶会が開催された日付順に①～③とし、④は①の期間の出席者等を改めて整理した名簿かと思われることから末尾に配した。後掲の翻字もこの①～④の順序で掲げている。

ここで吉田道可が銀閣寺において開催したこの茶会に関する既知の情報を整理しておこう。まず道可の墓碑銘に「寛政七年嘗設茶宴于洛東銀閣寺、八年亦如之、京摂及諸邦賢豪、赴会之者甚多云」とあって、寛政七年及び同八年に茶会が開催されたらしいことが確認できる。また『都林泉名勝図会』巻二には、佐久間草偃の描く「銀閣慈照寺集芳軒」の挿絵に添えて、「吉田敬といふ人銀閣のかたはら集芳軒にて茶湯せし時」との詞書で「へたてなくかたらひをれはおのつから月待山のむかしおほゆる」との橋本経亮の和歌一首がある。[7] さらに『都林泉名勝図会』の増修本[8]には、道可が慈照寺内に建てたという「茶泉碑」の挿絵が加えられ、さらにその建碑ならびに当該茶会に際して大典顕常や慈延らが詠んだ詩歌が二丁分追補されている。このようにわざわざ記事が増補されている点からも、当該茶会は当時の京都で大いに話題となっていた様子がうかがわれる。

さて、先行研究のうち当該茶会に関するまとまった記述としては正木直彦「聆涛閣古文書と集古帖」の以下のものがある。

寛政七年に道可が施主となつて東山慈照寺銀閣の大修繕をして其落慶の祝に道可が各種の茶道具を新調して百回の茶会を催した。其翌年にも同様の茶会を催したといふことである。其茶会の記念に来客が席上の即吟や即興の絵画を集めたものが銀閣帖と名付けて家に伝つてゐる。その列名を見ると凡そ当時京坂の聞人が此茶会に招かれた趣が看取される。縁故ある搢紳は申すまでもなく諸山の龍象や皆川淇園や藤貞幹や木村蒹葭堂なども其中にある。[9]

ここで触れられている「銀閣帖」なる書画帖は現存未詳であり、その他の記述も依拠資料が明示されていないこともあって、正

木論文の当該記述の取り扱いにはいささか難しい部分が残る。結局のところ道可による銀閣寺茶会に関する同時代のまとまった資料としては、先掲の『都林泉名勝図会』の記事がほぼ唯一のものであったということになろう。したがって、このたび出現した『〔寛政七年吉田道可銀閣寺茶会記〕』はこれまで不明瞭であった当該茶会の実態を摑むことのできる第一級の資料だということができる。

以下、この『〔寛政七年吉田道可銀閣寺茶会記〕』の内容面に関して若干の検討を加えておきたい。まず①～③に書き留められている寛政七年の五月から十一月にかけての総計七十三席の茶会のうち、①と②のあいだには約三ヶ月弱の空白がある。おそらく六月三日から九月前半まで道可は呉田の居宅に戻っていたのであろうが、とはいえ外題に「銀閣」や「東山」と見えることから、①と②の両冊はともに慈照寺銀閣において開催された茶会の記録と判断してよいだろう。

その点からすると、③の一冊は他とは少しく性格を異にするもののように思われる。見返しにある墨書「寛政七年乙卯／九月十六日／京着　橘子江着／光源院宿／同十一月三日夜より／木や町座敷江移る」によれば、九月十六日に京都に着いた道可は「橘子」（道可の知友であった橘泰のことであろう）のもとを訪れ、また相国寺の塔頭である光源院（当時の住持は維明周奎）に宿泊し続けていたが、十一月三日夜からは木屋町の座敷に移ったという。②末尾の十一月二日の会に「送別茶」と注記されていること、③冒頭の十一月三日正午の会の末尾に「及薄暮帰去来」とあることから、その翌日の十月四日以降は、茶会自体も銀閣寺から木屋町の貸座敷へと場所を移して催されたものと思われる。②と③は会の日付が連続しているにもかかわらず冊をあえて改めている点、③にのみ外題に「銀閣」や「東山」といった語が用いられていない点も傍証となろう。そうなると①と②及び③の冒頭一席を合計しても六十三席であるから、少なくともこのたび出現した『〔寛政七年吉田道可銀閣寺茶会記〕』に即して判断する限り、先掲の正木論文が述べるように「百回の茶会」が寛政七年中に銀閣寺で行われたとはやはり考えにくい。あるいはこの「百回」というのは、翌年に催されたものや銀閣寺以外での茶会も含めた総計ではなかろうか。

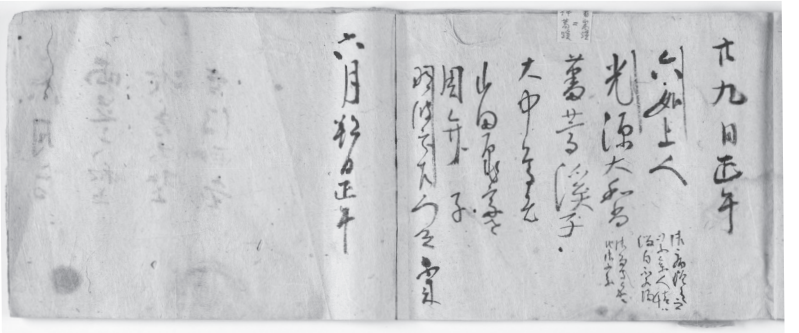
ところで『〔寛政七年吉田道可銀閣寺茶会記〕』の記載内容は茶会の開催日と来客者名にほぼ限られている。通常の茶会記であれば、用いた道具や提供した懐石膳の献立なども記されてし

かるべきところだが、本資料では十月三日条に「菓子茶」、すなわち懐石を出さない菓子だけの茶会であることを断っていたり、あるいは五月十六日条などに「朝茶」、すなわち通例の正午ではなく早い時刻に始められた会であることを明記していたりする程度で、それ以上の詳細は一切記されていない。おそらく道具立てや献立などについては別途記録が作成されていたものと思われる。とはいえ、残念ながらいまそれを確かめる手立てがない。

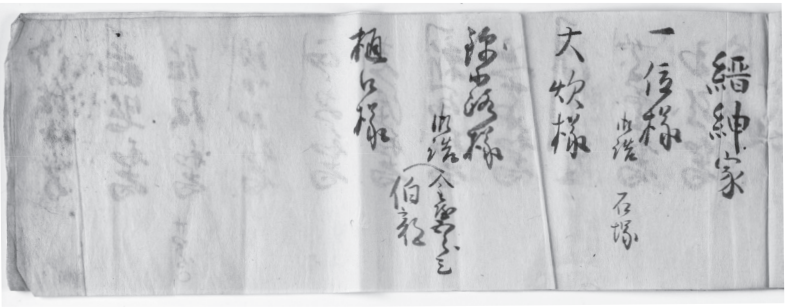
本資料には総計二百三十二人の名が記載されている。[10] 個々の出席者の素性については後掲の「収録人名一覧」を参照されたいが、その身分や職業はさまざまであり、また伝未詳の人物も少なくない。とはいえ、そこには一定の傾向が認められることも確かだろう。たとえば橘泰『筆のすさび』によれば道可の茶は庸軒流だというが、本資料にも鈴木知足庵・西村樸斎・比喜多元達・久田宗参・速水宗達・山田蘭斎といった茶人や、塗師中村宗哲や茶道具商の竹屋忠兵衛など茶道具関係の人名が一定数見える。

また松源中奨や維明周奎をはじめ相国寺関係者が頻繁に来訪しているのも、会場の慈照寺（銀閣寺）自体が相国寺の塔頭であるから当然ではあるが、注目される。道可は天明三年（一七八三）十月に相国寺へ春屋妙葩の墨蹟「応無所住而生其心」を寄進しており、[11] またこれは先掲の正木直彦論文以外に依拠すべき資料はないのだが、今回の茶会興行自体が銀閣寺の修繕を道可が行ったことが機縁らしいことから、道可は相国寺とかなり密接な関係があったものと推定される。ほかにも妙心寺・南禅寺・大徳寺・東福寺（及びそれらの塔頭）など禅宗寺院の住持、また真言宗の法安寺（泉涌寺塔頭）や河内国渋川郡の浄土真宗寺院である顕性寺の住持なども出席しており、茶の湯自体が寺院と関わりが深いとはいえ、出席者のうちでは僧の割合が最も多く、全体の約三割を占める。

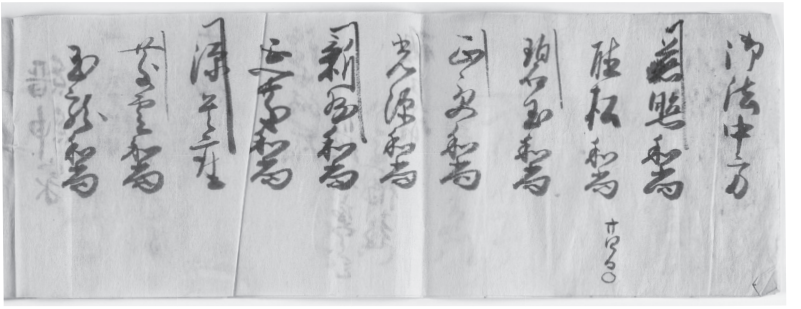
僧以外の出席者では、広沢仁左衛門をはじめとする諸大名の京都における御用商人が目につく。その当主ないし親族と思しき人物を含めると総計十一名にのぼる。加えて商家の当主や隠居も多いが、彼らはいずれも社会階層が道可と等しく、また当然ながら商売上でもなんらかの繋がりを有していたものと推定される。商家が出席者全体に占める割合は二割強で、僧に次いで多い属性である。出席者のうち伴蒿蹊・赤松滄洲・細合半斎・春政美・富士谷御杖・世継寂窓・入江石亭・上田咸之といった



第一冊「寛政七卯年五月洛東於銀閣茶湯来客日記」第六丁表



第四冊「寛政乙卯夏五月東山茶燕迎賓稿」第二丁表



第四冊「寛政乙卯夏五月東山茶燕迎賓稿」第二丁裏

和漢の学者・芸文家、また風折左京・東東洋といった絵師の存在はこの手の風流な催しに欠くことのできないもので、先に触れた現存未詳の書画帖『銀閣帖』も、彼らがさまざまに色を添えたものであっただろう。

公家では日野資枝・大炊御門家孝・北小路祥光・外山光実・錦小路頼尚・樋口宣康の名が見える。道可にとって日野資枝は和歌の師であり、大炊御門家孝は書の師匠であるが、当該茶会に頻繁に出席している石塚寂翁もまた和歌を日野資枝に学んでいるから、道可とは同門ということになる。また朝廷や宮家に仕えた地下官人や公家の家臣、坊官なども少なくない。医師も一定の割合を占めており、それと思しきものも含めると十一名を数える。道可の墓碑銘にも、古医方を唱えた吉益東洞の治療を受けたことから医学に関心が深かった旨の記述があり、そうした縁で東洞三男の吉益贏斎をはじめとして複数の医師が当該茶会に招かれたのであろう。なお、武家では伊予松山藩士の金子義篤をはじめ、諸大名家の京屋敷留守居が目立つ点が注意される。[12]

以上、本資料は、道可の交友圏を具体的に知りうるものであることはもちろん、当時の京都においてこうした風雅の営みがどのような階層のひとびとによって担われていたのかを一望できる点においても意義ある資料といえる。なお付言しておけば、④の「寛政乙卯夏五月東山茶燕迎賓稿」は外題および内容から、①の期間の茶会出席者を改めて道可が整理したものと思われるが、①と④に掲げられている人名を相互に照らし合わせてみると、必ずしも全てが対応してはいないようである。④にのみ見え、①に見えない人名に永楽屋伊兵衛・大村彦太郎・七里九朴・大廈和尚・多田五郎右衛門・多田寛治・津幡民部少輔・樋口源左衛門・藤井宗就などがある。上記の人々は①に見える未詳人物のうちのいずれかと同人である可能性は残るものの、④には実際に茶会に出席した人物以外にもその期間に道可が京都で接触した人名を記載している可能性もあろう。さらにいえば、『都林泉名勝図会』巻二での銀閣寺茶会に関する記事中に登場するにも関わらず、本資料に名が見えない人物としては歌僧慈延が挙げられるし、更に先掲の正木直彦論文において『銀閣帖』に揮毫していた人物として名前が挙げられていた皆川淇園・藤貞幹・木村蒹葭堂の名も本資料には見えない。おそらく彼らは翌年の寛政八年の折の茶会出席者だったのではないだろうか。

注

（1）広瀬蒙斎『有方録』寛政九年二月条、橘泰『筆のすさび』（文化三年刊）、頼春水『在津紀事』（文化七年成）、中島棕隠「琪林十咏」（安政元年序刊『水流雲在樓詩集』上巻所収）等参照。

（2）国立歴史民俗博物館にて企画展示「いにしえが、好きっ！―近世好古図録の文化誌―」が二〇二三年三月七日から五月七日にかけて開催された。

（3）拙稿「摂津呉田吉田家の文事と出版」は『国立歴史民俗博物館研究報告』の共同研究「聆涛閣集古帖の総合資料学的研究」特集号に掲載予定である。

（4）注2前掲企画展示の図録に図版掲載。

（5）皆川淇園撰。全文は注3前掲拙稿「摂津呉田吉田家の文事と出版」に、神戸市東灘区小林墓地に現存する墓碑銘及び東京文化財研究所の所蔵する淇園自筆本の紙焼写真に基づいて掲げている。

（6）『桑名前修遺書 蒙齋先生文集別録』巻三（一八九二）の翻字による。

（7）橋本経亮による当該和歌は経亮没後に編纂された歌文集『香果文藻』（國學院大学所蔵梅宮社橋本家書類の内）にも収録されており、そちらには詞書に「寛政七年五月十八日」との注記がある。この注記の日付は本資料の「橋本肥後守」こと経亮の茶会の出席日と一致している。

（8）京都大学附属図書館蔵本（京・ミ・一三）等参照。

（9）正木直彦「聆涛閣古文書と集古帖」（『美術研究』第四号、一九三二）。

（10）同一人物が複数回出席している場合があることから、論者の判断に基づいて名寄せを行った上での総数となる。

（11）『大本山相國寺・金閣・銀閣寺宝展』（北海道新聞社、一九九八）解説参照。

（12）以下、『〔寛政七年吉田道可銀閣寺茶会記〕』に登場する二百三十二名のうち、素性を判断しうる百七十四名について属性別に各割合を多いものから順に掲げると以下の通りとなる。

僧 31％　商家 25％
学者・芸文家 9％　地下官人（公家家臣を含む）8％
医師 6％　武家 5％
公家 4％　茶人 4％

職人　4％　　坊官　2％
絵師　1％　　神職　1％

なお、後掲の収録人名一覧において「未詳」などとしていても、その敬称や名乗りなどから属性を適宜推定し、また複数の属性を兼ねる人物については論者の判断で整理した（例えば大炊御門家の家臣で能書でもあった上田成美は「地下官人（公家家臣を含む）」に、対馬藩の御用商人で漢詩人でもあった春日亀弥太郎（春政美）は「学者・芸文家」に分類した）。

《翻印》

〈凡例〉

翻字にあたっては、以下の処理を加えた。

・用字は通行のものに改め、合字は開いた。
・解題に記した①～④の順に配し、冊次及び外題に基づいた書名を◎を冠して見出しとして掲げた。
・明らかな誤字や脱字等はその文字の右傍に（ママ）等と注記した。
・読みやすさを考慮し、原本の体裁に関わらず、日付及び時刻は字下げせず、各席の出席者名は行頭から一字下げに配置した。ただし原本において、人名の書かれる位置に明らかな高低差が認められる場合は、なるべく原本の趣を残した配置とした。
・汚損等で判読困難な文字、難読の文字については、その文字数分の□で示した。
・原本の一部に備わる各席ないし各日を区切るための縦線は無視した。

・読みやすさを考慮して、それぞれの日ごとに空行を一行挿入した。
・貼紙による訂正が施されている場合、まず貼紙に書かれている文字を翻字し、それに続けて（右～行貼紙下「　」）などと適宜注記を加え、貼紙下の文字を「　」に括って翻字した。なお、訂正のためではなく、追補等の目的で貼紙が貼られている場合は、その旨を注記しつつ同様に翻字した。
・改行は極力原文のままとしたが、貼紙下の文字に関しては煩瑣となるため改行箇所を／で示した。
・各丁末尾に表紙であれば（表紙）、第一丁表ならば（一オ）、第二丁裏ならば（二ウ）などと表記した。
・細字注記及び割書は〈　〉に括り、改行箇所は／で示した。
・その他、一般的な注記は（　）に括って示した。

◎第一冊「寛政七卯年五月洛東於銀閣茶湯来客日記」

寛政七卯年五月洛東於
銀閣茶湯
来客日記
月波樓主人（表紙）

五月九日初会
正午
源首座（相国）
松井和泉（南都）
橘七郎右衛門（四条）

十日正午
慈照大和尚〈号／正源〉（相国）
般若和尚（東山）
（右一行貼紙下「聴松大和尚（南禅）」）
山中黙斎子（岡崎）（一オ）

十一日正午
碧玉大和尚（号／瑞巌）（大）
正受大和尚（号／龍渓）（同）
光源大和尚（相国）
天真和尚（江府号／東陽）（江府）
（右一行貼紙下「清水六兵衛」）
六兵衛つれ

十二日正午
慶雲大和尚（相国）
三甫大和尚（金閣業帯）（林光院）
（右一行貼紙下「玉龍西堂」）
世継八郎兵衛殿（岐阜や）
（右一行貼紙下「銀閣西堂」）（一ウ）

十三日正午
雅隠和上（濃州崩立政寺）
眼道和上（京師十念寺）
大輗（雅隠師弟子）

十四日正午
疋田元達子（江）
行
休日（二オ）

十五日正午（上五字見消ち）
休日（上二字見消ち）

十六日朝茶
久田宗参老（近代付箋鉛筆書「久田宗参」）
竹内章庵
辻之倉九兵衛

十六日正午
鈴木知足菴
菅谷中務卿（大仏大工坊官）
薮沢清記殿（同御用人）（上欄書入「改姓坂元」）
御詰

雁金や半兵衛
東洞院六角店
帯地や也（二ウ）
（右五行貼紙下「藤井市郎次（東洞院鳴や）〈廿日〉／寺井善右衛門（三条麩や）〈廿日〉」）

十七日正午
（貼紙による追補「十七日朝／相国奎長老／小西与右衛門（丹後）／
玄紹（上二字見消ち）　座元」）
延慶（さいか）大和尚
日春亀弥太郎殿（四条（ママ））
団藤兵衛殿（千切や）
野村藤右衛門殿（千切や）
横山九兵衛
（右三行貼紙下「清水六郎平殿隠居（建仁寺町）／団藤兵衛／野村藤右衛門」）

十八日正午
休日（上二字抹消）
金子仙左衛門殿
橋本肥後守殿

上田理兵衛殿（三オ）

十九日正午
速水宗達老（上五字墨及び貼紙により抹消）
石塚寂翁殿
西村樑斎（下立花衆隠居）殿
上田元周老（頭書「御医法眼位也」）
（右一行貼紙下「三宅近江殿（合点あり）」）

廿日正午
三宅近江守殿
藤井市郎次殿〈東洞院／しまや〉
寺井善右衛門殿〈三条／ひしや〉
広瀬庄兵衛殿（三ウ）

廿一日正午
錦小路様
樋口三位様
伯部周了殿

御詰　五郎三郎殿

廿二日正午

比喜多元達老

川村松屋老（富田林　正億）

長井義庵老

藤江喜右衛門殿（四オ）

廿三日正午

広沢仁左衛門殿

吉益掃部殿

細辻伊七殿

竹や忠兵衛殿〈中暑断／不参〉

善蔵勤ル

廿四日正午

南昌大和尚（東福）

聴松大和尚（南禅）

慈昭西堂

風折左京子

小山田玄態老

（右五行貼紙下「金地院大和尚（南禅也）／聴松大和尚／御詰／風折左京」）

（四ウ）

廿五日正午

阿部笠翁老宗

吉田喜平治

高木猪八郎殿

吉田喜五郎

武田伊助殿

廿六日正午

伊良子長門守殿〈合点あり〉〈大事ニて／不参〉

入江石亭子〈合点あり〉〈同〉

鈴木要人殿

詰（五オ）

廿七日正午

大川良平子（合点あり）〈応招不会／茶〉
池田や長兵衛殿
佐野栄庵老〈紹益之／孫名家也〉
〈三客ニ／成ル／国鸞氏／奥之招ニて／酒肴出申候〉

廿八日正午
瀬尾元三郎殿
亀田彦助殿〈しの流香家／古書画めきゝ〉
人見九郎右衛門殿〈□吉之／舎兄也〉
奥村吉兵衛殿（五ウ）

廿九日正午
六如上人（合点あり）〈御病僧有之／御不参人情ハ細臼不為隔〉
光源大和尚（合点あり）〈御留守被成候／由御不参〉
蕃（ママ）蒿渓子（近代付箋鉛筆書「蕃蒿渓＝伴蒿蹊」）
大中尊者
山田亀斎老
周弁子
那波二郎左衛門殿（合点あり）不来

六月朔日正午
（空白ママ）（六オ）

六月二日
両足大和上
冷香大和上
長得西堂（六ウ）
（以下、七オ～十六ウ、白紙）

◎第二冊「乙卯暮秋東山茶燕来賓録」
樫川老人
乙卯暮秋東山茶燕来賓録（表紙）

初会九月廿一日
新州西堂
巣松西堂

源首座
宇野（詰）

九月廿二日
河野大炊頭
□（上一字書き止しで見消ち）
佐々木蔵人
高崎一馬（一オ）

九月廿三日
松（上一字「杉」と訂）田伝六郎
杉（上一字「木」と訂）田平次
（右二行貼紙下「東溟長老／受正（ママ）長老／今宮神主」）
加賀屋新蔵
茶屋久右衛門

九月廿四日休燕（一ウ）
（空白ママ）

九月廿五日
細合半斎子
諏訪（矢倉）九右衛門殿〈鍵や〉
桂彦右衛門殿〈ふんや〉
諏訪嘉兵衛殿〈松葉や〉
塗師宗哲殿

廿六日　休席
中嵒（長遠寺）和上
圭翁（不動院）和上
（右二行見消ち）（二オ）

九月廿七日
樫田大蔵卿
谷野土佐守
入江石斎老〈合点あり〉〈病気／断〉
津田到外（合点あり）

九月廿八日

片山貫次
疋田角之丞
とくらや与兵衛（二ウ）

九月廿九日
中嵜和上（長逸寺）
圭翁和上（不動院）
（右二行貼紙下「準敬長老（常閑院）
上／泉涌法安寺／首座」）

晦日
休日
北野行（三オ）

十一（上一字見消ち）月朔日
（空白ママ）

二日
伊良子長門守（室町丸太上町）

中嵜和上（長逸寺）／晴実西堂（宇治楽寺）　圭翁和上（不動院）

丸山荊山（菊亭様御用人隠居）
（右二行見消ち）（三ウ）

三日
金剛寺
妙本寺（八幡）
大渓上人
曾谷法三（小川下立売寺ヶ所）
富士谷千右衛門（近代付箋鉛筆書「富士谷御杖」）
猪飼五郎兵衛（上四字「三郎衛門」と訂）〈仙台館入之由也〉（橋詰大文字や）
木村元悦（上四字見消ち）不来（下立売小川角遠州流也）
同日菓子茶
聽松大和上
慈照西堂

四日
水谷衛門尉（濃口官人）
馬野仙や（堀川中立売寺）
櫛林　族（同）

山崎不騫（泉州堺士）（四オ）

五日

荻野典薬大掾

島田與三右衛門〈夷屋／主人也〉

下村孫八郎〈大丸や／主人也〉

駒井吉兵衛

六日

正受大和上

碧玉大（上一字見消ち）和上

應　首座

佐々木甲（変カ）背守（今宮神主）（四ウ）

七日

桂林院（妙心寺）（上一字見消ち）和上

八日　休日

（空白ママ）（五オ）

九日　休日

〈知足菴へ／行〉

九日留守中へ大賓御止宿

六如上人

冷香大和上

環（童光）中西堂

春日亀弥太郎

右十日之朝茶也

十日

二　楠源左衛門

一　医徳堂蘭桂和上

（右一行貼紙下「清田大太郎（合点あり）不来」）

三　野瀬善兵衛

四　那波次郎左衛門

□（上一字見消ち）夜阿部竹翁来臨

十一日朝茶

二　善道寺和上

一　安部竹翁

三　西村（上一字「田」と訂）作兵衛（五ウ）

十一日

三　興津孫作（室町二条下ル町吉文字や）

一　佐野栄庵

二　稲垣次郎左衛門（西洞院たこ薬師ヒル所也茶や）〈尾張茶やノ／支流也〉

四　かゝ屋喜助（浪花）

十二日

一　義了庵（衣棚二条下ル所）〈遠州流宗匠〉

三　井筒屋理兵衛（五条室町）〈亀田氏〉

二　坂倉周蔵〈岸和田／留守〉（六オ）

十三日

伊良子長門守（合点あり）不参

二　畑民部

三　畑源太郎（雲州御留守居之令郎也）

（右一行貼紙下「丸山荊山（合点あり）不参」）

四　横山柳珉〈畑医学堂／御門人〉

五　尾本吉左衛門

六　竹田与一郎

十四日

井上周怡（高倉丸太町下所）

井上四郎次郎（一条烏西へ入）

石井鋏次郎（六ウ）

十五日

藤田彦太郎

山本弥次郎〈いせや〉

田中庄兵衛

金や五郎三郎

十六日

（空白ママ）（七オ）

十七日
瓊林和上（妙心寺）〈同侍者出院ニ而／□侍者詩有〉
衡梅和上
（右二行貼紙下「前内大臣様」）
三上伝左衛門（平野）
浅田礼助
本咲理右衛門（尼崎）

十八日　休日
今井望心
湯浅七左衛門（上四字「三蔵」と訂）
浅井庄右衛門（七ウ）

十九日
（貼紙による追補「丹楓御遊覧也／一位様／外山様／北小路様／（以下二行は行頭一段下げ）田中典膳／石塚寂翁」）
円福寺方丈（合点あり）
金蓮寺（合点あり）
了蓮寺（合点あり）
守興和上（合点あり）

廿日
準敬長老（善朋院）
晴実西堂（橋寺）
法安寺
山邊内記（合点あり）　不参（八才）

十月廿一日
一　聖光寺（寺町）
五　法眼東洋（奥狩人画工）
讃岐や忠兵衛〈倉本氏〉
黒田嘉（上一字見消ちし右傍記「平」）兵衛
福島甚兵衛

廿二日
下妻少進（西本願寺）
大塚七右衛門〈亀や奥陸（ママ）〉

片山貫次（八ウ）

廿三日

入江石亭

朝山斎之助〈細川留守居〉

角田兵部卿〈粟田坊官〉

岩波主水（合点あり）〈同用人〉（不参）

田並呉明（合点あり）　不参（上二字見消ちし、頭書「来」）

廿四日

大炊様（上三字貼紙に記す）

上田伊予守

大町淳哲

山本駿河守（九オ）

廿五日

真覚院家

坂本　御殿留監山門ニて

薬樹院

行光坊　山門出世役

鈴木多門

石井直記〈輪王河原／里邸留護／役〉

廿六日

奥田又慶

広沢宗真

荻田次兵衛　万次

入江十次郎（合点あり）〈不参〉

井口久左衛門

右御服所也（九ウ）

廿七日

二　畑六郎左衛門（雲州御留守居）

絹川平馬（小倉御留守居〈合点あり〉）（合点あり）〈不参〉

一　三浦七左衛門（姫路御留守居）

三　橋（上一字「端」と訂）長兵衛〈雲州／御用達〉

四　端（上一字貼紙下「上（墨滅）」）林三入

廿八日
承寛坊（西さか）
周弁
野路井刑部卿（宮様坊官）（十オ）

廿九日
五　円福寺（寺町）（合点あり）〈断〉
三　金蓮寺（四条道場）（合点あり）
一　了蓮寺（四条）（合点あり）
四
二　守興和上（合点あり）

十一月
朔日　碩庵
顕性寺（久宝寺御坊）（合点あり）
広教寺（大坂薬摩掘）
毫摂寺（小浜）
畑柳敬法眼
守拙坊（御詰）（十ウ）

二日
霜月朔日朝
奎長老
源首坐
小野宗朔
同（上一字「二」と訂）日正午送別茶
源首座亭主
児嶋吉郎兵衛
比喜多卯作
品川内膳（さか）
木村元悦
上田元長
（右十一行貼紙下「承寛坊（西蔵蔵）／野路井刑部卿（宮様坊官）／横山友甫（合点あり）　不参／駒井安芸（東寺坊官）（合点あり）　不参」）（十一オ）

（以下、十一ウ～十六ウ、白紙）

◎第三冊「留京会茶期」

留京会茶期　北渚（表紙）

寛政七年乙卯

九月十六日

京着　橘子江着

光源院宿

同十一月三日夜より

木や町座敷江移る（見返し）

十一月三日正午

広沢仁左衛門殿

同伴（小野宗朔
　　橘七郎右衛門）

跡見（源首座
　　かゝ屋藤七次郎）

及薄暮帰去来

十一月五日正午

比喜多元達老

同伴（源首座
　　小野宗朔）

帰かけニ石塚へ立寄夕飯ニ呼候

六日

一葉院御茶正午

経明長老　小野

十一月八日　正午

小川下立売下ル西側

曾谷法三老

同伴　宗朔

たち花（一オ）

十一月九日

瓊琳院様

連客

石塚寂翁
広沢隠居又ハ仁左衛門殿
ニても御両所之内自拙者
御誘引申くれ候やう
昨夕被頼也

十一月十日正午
藤井市郎次殿（上六字見消ち）
延引

十二日
（空白ママ）（一ウ）

十三日
奎長老様　御出

十四日
西村榛斎殿〈六日晩／石塚氏／ニて約束／申候也／三客伴也〉

十五日　正午
伊良子長州殿（二オ）

十六日
常長老様御出

十七日正午
樋口様江御茶
石塚寂翁
安藤五郎三郎

十九日　廻勤
（空白ママ）（二ウ）

廿日正午
久田宗参老行
石塚寂翁
橘七郎右衛門

在宿

（空白ママ）（三オ）

廿四日正午

錦小路様へ行

比喜多元達

橘七郎右衛門

（空白ママ）（三ウ）

◎第四冊「寛政乙卯夏五月東山茶燕迎賓稿」

寛政乙卯夏五月

東山茶燕迎賓稿（表紙）

吉益掃部

伊良子長州

永楽屋伊兵衛

広沢仁左衛門

鈴木知足庵

藤井市郎次

寺井善右衛門

比喜多元達

児嶋吉郎兵衛

藤井宗就

速水宗達（一オ）

大村彦太郎

七里彦次右衛門（上五字見消ちし「九朴」と訂）

那波次郎左衛門

入江石亭

鈴木多門

金子仙左衛門

橋本肥後守

世継八郎兵衛（合点あり）○
吉（上一字「多」と訂）田五郎右衛門　○
寛治　○
山中黙斎（合点あり）○（一ウ）

縉紳家
一位様
御詰　石塚
大炊様
錦小路様
御詰（金屋五郎三
伯部）
樋口様（二オ）

御法中方
慈照和尚（合点あり）
聴松和尚　〈廿四日○〉
碧玉和尚（合点あり）

正受和尚（合点あり）
光源和尚（合点あり）
新州和尚（合点あり）
延慶和尚
源首座（合点あり）
慶雲和尚（合点あり）
玉龍和尚（二ウ）
金閣和尚
冷香和尚
金地院和尚　〈廿四日○〉
大廈和尚
巣松軒和上（上五字後補か）（三オ）

清水六兵衛
団藤兵衛　○
野村藤右衛門　○
瀬尾元次郎　○
橘七郎右衛門（二重合点あり）
南都
松井和泉（合点あり）

樋口源左衛門（頭書「在坂」）
西村樑斎（合点あり）
三宅近江
菅谷中務（合点あり）
石塚寂翁
佐々木蔵人
河野大炊頭（三ウ）
津幡民部少輔
長井義庵（京や町観世上町）
笹や喜右衛門（同）
風折左京
大川良平
隠岐大輔（粟田御内）（四オ）
（以下、一丁半白紙）
樫川居士（裏表紙）

《附録》『〔寛政七年吉田道可銀閣寺茶会記〕』収録人名一覧

凡例

・本一覧表は『〔寛政七年吉田道可銀閣寺茶会記〕』に記載されている人名を整理し、判明した限りの人物情報を記したものである。

・同一と目される人物が異なった名称で複数回登場する場合、最も一般的と思われるものを「資料記載名」に掲げ、それ以外は「別称」項に掲げた。なお、明らかな誤字については訂正して掲げ、「殿」等の敬称は適宜省いた。

・墨や貼紙等で抹消されていたり、「不来」等と注記されていたりなど、茶会には実際に出席していないと思われる人物についても区別せずに立項した。出欠の区別については翻印を参照されたい。

・「注記等」の項には資料中に見える当該人物に関する注記類を掲げた。同一人物に関して複数回付された注記のうち、内容上重複するものについては適宜整理してまとめた。

・「出席月日」について、例えば五月九日を5/9などと表記した。朝の茶会の場合は「朝」、貼紙下に人名が記載されている場合は「貼紙下」と月日に続けて付記した。④「寛政乙卯夏五月東山茶燕迎賓稿」に記載されている人名については、当該項に「迎賓稿」と記した。

・配列は「資料記載名」の読みの五十音順とした。

資料記載名	別称	注記等	出席月日	人物情報
浅井庄右衛門			10/18	京の書肆有斐堂浅井庄右衛門（荘右衛門とも）か。
浅田礼助			10/17	未詳。
朝山斎之助		細川留守居	10/23	文化八年刊『京羽二重大全』巻二に熊本藩細川家の知恩院古門前西町の京屋敷の留守居として「朝山思地」の名あり。
阿部竹翁	安部竹翁		10/10夜，10/11朝	未詳。「阿部笠翁」と同人か。
阿部笠翁			5/25	未詳。「阿部竹翁」「安部竹翁」と同人か。
猪飼三郎兵衛		橋詰大文字や・仙台館入之由也	10/3	仙台藩御用商人大文字屋の一統。明和五年版『平安人物志』学者項に「猪飼長康 字嘏常号蘭畹 下立売堀川東南角 猪飼三郎右衛門」とあり、堀永休『嵯峨誌』（嵯峨自治会、一九三二）によればこの長康は広沢池のほとりに大文字屋屋敷と俗称される別荘を構えていた（四五頁）というが、同人ないし縁者か。
井口久左衛門			10/26	播磨国林田藩竹部家御用商人。「上長者町室町西／用達 井口久左衛門」（文化八年刊『京羽二重大全』巻二）
池田や長兵衛			5/27	未詳。幕末明治期の蛸薬師小川角の蠟問屋に池田屋長兵衛の名が確認できるが（文久四年刊『都商職街風聞』等）同一の商家かは不明。
石井錬次郎			10/14	文化八年刊『京羽二重大全』に肥後熊本藩細川家の御用商人として「一条烏丸西へ入町／同（用達） 石井鉄五郎」とあり。同人か。
石井直記		輪王河原里邸留護役	10/25	未詳。
石塚寂翁			5/19, 10/19, 11/5, 11/9, 11/14, 11/17, 11/20, 迎賓稿	歌人。日野資枝門。神作研一「石塚寂翁の家集について」（『上方文藝研究』第六号、二〇〇九）参照。

一位様				10/19, 迎賓稿	日野資枝。公家。
井筒屋理兵衛		五条室町・亀田氏		10/12	近江に出自を持つ京の商家井筒屋利兵衛。
医徳堂蘭桂和上				10/10	蘭桂正香。医徳山薬師院住持。黄檗僧。和歌は日野資枝門。神戸女子大学蔵蘭桂旧蔵『詠歌一躰』（九一一・一〇四-Ei）識語参照。
稲垣次郎左衛門		西洞院たこ薬師上ル所也茶や・尾張茶やノ支流也		10/11	未詳。
井上周怡		高倉丸太町下所		10/14	肥後の人。熊本藩士か。石塚寂翁『歌集』（大阪公立大学図書館森文庫蔵・九一一・一//KAS）に「肥後井上周怡帰国のとき御餞別に」との詞書ある和歌あり、日野資枝述・石塚寂翁記『和歌問答』に「或日、御当座に、寝覚恋と云題を井上周怡詠候。移りかと思ふやはゝ夢のかゝ小よまくらね覚し床に残るそらたき」（『近世歌学集成』中巻、明治書院、一九九八）云々とあり。また東京大学総合図書館蔵南葵文庫旧蔵『周易神秘伝解』（B-六〇-二三一九）巻頭に「豊嶋亘先生口授　斎藤高寿　井上周怡　筆受」とあり。豊嶋亘は筑後の人で広瀬淡窓の門人。文政五年十月頃に自死している（『淡窓日記』巻十九文政五年年十月七日条「敲月話次。聞豊嶋亘自縊死。為狐所魅云」）。斎藤高寿は熊本藩士で儒者としても知られる斎藤芝山。なお『国書総目録』（及び国書データベース）等では撰者名を「豊島旦」と誤る。
井上四郎次郎		一条烏西へ入		10/14	文化八年刊『京羽二重大全』に肥後熊本藩細川家の御用商人として「高倉丸太町下ル町／同（用達）　井上四郎二郎」とあり。同人か。
今井量心				10/18	未詳。
伊良子長門守	伊良子長州	室町丸太上町		5/26, 10/2, 10/13, 11/15, 迎賓稿	伊良子光顕。医師・官人。

入江十次郎			10/26		未詳。
入江石斎			9/27		入江石亭と同人か。
入江石亭			5/26, 10/23, 迎賓稿		大坂の鑑定家。『久保之取蛇尾』等の著作で知られる入江昌喜の養嗣子。
岩波主水		同（粟田）用人	10/23		未詳。知恩院宮侍の岩波庸重か。
上田伊予守			10/24		上田成美。大炊御門家諸大夫で書家としても知られる（『地下家伝』『平安人物志』）。
上田元周		御医法眼位也	5/19		医師の上田玄周か。玄周は吳秀三「滙纂 杏壇訪古」（『神経学雑誌』第三一巻第六号、一九三〇）に「上田玄周　名ハ徳基、蘭渓ト号ス。又通称を養安ト云フ。上田玄三ノ子ナリ。進ンデ法眼ニ叙セラレ、光格天皇ニ侍シテ天脈ヲ拝診シ、寵遇殊ニ渥ク、玄周還暦ノ賀ニ天皇ヨリ鶴頸亀耳ノ釜ヲ賜ハリ、歓無極ト名ヅケテ家宝トス。文化八年三月二十四日歿ス。年六十四。（続日本医譜）」とあり。
上田元長			11/2		医師。小石元俊らによる寛政十年の人体解剖記録『施薬院解男体図』（京都大学附属図書館蔵）に序を寄せている。また東北大学附属図書館蔵『享和元年酉三月社中年寄仕分覚』（速水宗達と門人立との金銭のやり取りの記録）に名あり（畑中香名子「茶の湯における七事式の研究―速水宗達を中心に―（京都芸術大学学位論文）」（https://kyoto-art.repo.nii.ac.jp/records/374、参照?）。
上田理兵衛			5/18		上田咸之。上代様の書家。『平安人物志』文化十年版等所掲。
宇野			9/21		未詳。
永楽屋伊兵衛			迎賓稿		京の木綿商永楽屋細辻伊兵衛第三代富寿。

延慶大和尚	延慶和尚	さか	5/17, 迎資稿	嵯峨天竜寺の塔頭延慶庵住持の雪樵道祐。江村北海『日本詩選』（安永三年刊）巻頭の作者姓名一覧に「僧道裕（ママ） 号雪樵、随侍延渓桂洲師」とあり。「桂洲師」は嵯峨延慶庵の桂洲道倫（寛政五年没）。
円福寺方丈		寺町	10/19 貼紙下, 10/29	京極通四条坊門の東に位置した浄土宗寺院の住持。なお円福寺は明治期に愛知県額田郡岩津村（現岡崎市）へ移転。
應首座			10/6	未詳。
大炊様			10/24, 迎資稿	大炊御門家孝。公家。吉田道可の書の師でもある。
大川良平	国鸞氏		5/27, 迎資稿	儒者の赤松滄洲。字国鸞。
大塚七右衛門		亀や奥陸	10/22	京の菓子舗亀屋陸奥大塚治右衛門の誤記か。
大町淳哲			10/24	未詳。石塚寂翁『歌集』（大阪公立大学図書館森文庫蔵・九一一・一//KAS）に「大町淳哲頼八十八歳賀」「雪の朝に淳哲三省の主等持院の別荘をとふらひ給ひけれは／嬉しくや雪も思はむふりはへてとひこし人の心ふかさを」等とあり。
大村彦太郎			迎資稿	京都の商人。白木屋。
隠岐大輔		粟田御内	迎資稿	隠岐隆俊。青蓮院宮侍。号魯亭（天保九年版『平安人物志』書部）。
荻田次兵衛		万次	10/26	京の両替商万次屋。
興津孫作		室町二条下ル町 吉文字や	10/11	島原妓楼吉文字屋主人。羅人門で俳諧を能くした雅因（安永六年没）の次代か。
荻野典薬大掾			10/5	京の医師荻野元凱。

奥田又慶			10/26	京の呉服商百足屋隠居。手柄岡持（朋誠堂喜三二）こと秋田藩士平沢常富の寛政六年上京記録中に「室町御池上ル西側　むかでや　奥田仁兵衛　隠居　奥田又慶」とあり（濱田義一郎「手柄岡持自筆寛政六年京都へ御使ニ登りし日記」、『天明文学―資料と研究』東京堂出版、一九七九、所収）。
奥村吉兵衛			5/28	京の表具師。当時は五代吉兵衛。
小野宗朔	小野・宗朔		11/1 朝, 11/3, 11/5, 11/6, 11/8	『兼葭堂日記』寛政五年九月十一日条に名あり。また山形隆司「尼崎藩領の「御林」関係文書」（『地域史研究 尼崎市史研究紀要』一一〇号、二〇一〇）が紹介する「御林松木御下につき口上書」（小阪家文書四一九）に吉田家とも縁戚関係にある大坂平野屋五兵衛に松の木を払い下げるにあたって「大阪より小野宗朔　物七と申者植木屋壱人参申候」とあることから、平野屋の関係者か。
尾本吉左衛門			10/13	未詳。
小山田玄態			5/24	大坂の医師。文政七年版『浪花人物誌』医家部に「小山田玄態 伏見町」とあり。
雅隠和上		濃州前立政寺	5/13	美濃国立政寺住持か。
か、屋喜助		浪花	10/11	未詳。山中浩之・小堀一正「資料報告「中井竹山葬儀記録」」（『懐徳』第五四号、一九八五）によれば、文化元年に没した中井竹山の葬儀に際して作成された名簿に「加賀屋喜助」の名あり。同人か。
加賀屋新蔵			9/23	未詳。
か、屋藤次郎			11/3	未詳。
風折左京			5/24, 5/24 貼紙下, 迎賓稿	尾張の絵師。内藤東甫門。文化十四年跋刊『狂歌弄花集』に「風折左京有丈又東湖」として一首掲載。寛政五年から七年にかけ妙法院宮真仁法親王の前で席画を命じられている（『妙法院日次記』寛政五年七月八日条等）

樫田大蔵卿			9/27	樫田直良。知恩院宮坊官。『華頂要略門主伝』巻二十九天明五年十二月二十七日条「知恩院宮御使樫田大蔵卿」（大日本仏教全書巻一三〇、九一一頁、本居宣長『享和元年上京日記』五月十四日条「知恩院坊官／樫田宰相法印　入来」（筑摩書房版『本居宣長全集』第十六巻六四九頁）。			
春日亀弥太郎	日春亀弥太郎	四条	5/17, 10/10 朝	対馬藩宗対馬守家の御用商人。文化八年版『京羽二重大全』に「四条川原町東へ入／用達　春日亀弥右衛門」とあり。漢詩人春政美としても知られる（『平安人物志』天明二年版等所掲）。			
片山貫次			9/28, 10/22	未詳。			
桂彦右衛門		ふんや	9/25	三河刈谷藩等の御用商人。京都の人。『平安人物志』文政五年版に「桂殷　字咸々子号漪斎両替町二条南　桂咸子」とあり。中野稽雪『小沢蘆庵　里のとぼそ』第一集（蘆庵文庫、一九五一）の紹介する「小沢翁門人録」には「道賢。桂彦右衛門。道堅。」とあり。寛文五年に野田庄右衛門が開板した『夫木和歌抄』の求版本を刊行しており、書肆としての活動も確認できる。			
角田兵部卿		粟田坊官	10/23	知恩院宮坊官の角田諸厚か。「粟田（青蓮院宮）坊官」は誤記か。			
金や五郎三郎	五郎三郎殿・金屋五郎三・安藤五郎三郎		5/21, 10/15, 11/17, 迎賓稿	京の飾師金屋五郎三郎。安藤氏。			
金子仙左衛門			5/18, 迎賓稿	金子義篤。松山藩士で京屋敷留守居を務めた。			
亀田彦助		しの流香家古書画めきゝ	5/28	未詳。			

雁金や半兵衛		東洞院六角店帯地や也	5/16	京西陣の織物商。中村氏。
川村松屋		富田林・正億	5/22	大坂の飛脚問屋島屋当主で俳人大江丸として知られる安井宗一の自伝『きのふの我』に寛政二年、宗二七十の賀に際して「観心寺寒さらし一はこ」を贈った人物として「河内冨たはやし　川村正億」の名あり（藤村潤一郎「翻刻 寛政三年五月序 安井宗一（大伴大江丸）「きのふの我」」（『史料館研究紀要』第十号、一九七八）参照）。同人か。
環中西堂		常光	10/10朝	環中玄諦。建仁寺塔頭常光院住持。のち建仁寺第三四一世。
眼道和上		京師十念寺	5/13	京の十念寺（浄土宗）住持か。
北小路様			10/19	北小路祥光。公家。
木田平次			9/23	未詳。
絹川平馬		小倉御留守居	10/27	豊前国小倉藩京屋敷留守居か。
木村元悦	下立売小川角遠州流也		10/3, 11/2	寛政七年に大坂の豪商升屋平右衛門が仙台へと赴いた折の日記に、同道者の一人として「木村氏（以下割書）称元悦。京師之住。猪飼氏ノ友タリ。詩文ヲ嗜ム。勝地ヲ探ルノ癖アリ故ニ相伴フト云」とあり（有坂隆道「升屋平右衛門山方重芳の寛政七年仙台初下向日記」『山方蟠桃と升屋』創元社、一九九三、所収）。なお右の引用文中の「猪飼氏」は本資料にも登場する大文字屋猪飼三郎左衛門である。『皆川淇園門人帳』寛政五年七月六日の入門者「京都人　木村元悦　省　字思斎　四十五才」（『名家門人録集』臨川書店、一九八一、七六頁）も同人か。
行光坊		山門出世役	10/25	延暦寺一山のひとつか。
玉龍西堂	玉龍和尚		5/12貼紙下，迎賓稿	妙心寺塔頭玉龍院住持か。

義了庵		衣棚二条下ル所・遠州流宗匠	10/12	未詳。	銀閣西堂		5/12 貼紙下	慈照寺住持か。	楠源左衛門		10/10	未詳。
黒田平兵衛			10/21	未詳。	慶雲大和尚	慶雲和尚	相国	5/12, 迎賓稿	相国寺塔頭慶雲院住持。梅荘顕常か。	経明長老		11/6	未詳。
瓊琳和上	瓊林院様・桂林院和上	妙心寺	10/7, 10/17, 11/9	妙心寺塔頭瓊琳院住持。草山祖芳か。	源首座		相国	5/9, 9/21, 11/1 朝, 11/2, 11/3, 11/5, 迎賓稿	瑞源。相国寺の僧。	顕性寺		久宝寺御坊	11/1	河内国渋川郡の真宗寺院。「近松山顕證（ママ）寺　久宝寺村にあり浄土真宗にして本願寺御門跡御連枝代々住住職し玉ふ久宝寺御坊と称す」（『河内名所図会』巻四）
玄紹座元			5/17 朝	未詳。	広教寺		大坂薩摩掘	11/1	大坂の真宗寺院。「広教寺　願慶堀にあり祝松山と号す西本願寺御爪葛住職し給ふ」（『摂津名所図会』大坂部四下・原文傍訓略）。	光源大和尚	圭翁和上・奎長老	相国・不動院	5/11, 5/17 朝, 5/29, 9/26, 9/29, 11/1 朝, 11/13, 迎賓稿	相国寺塔頭光源院の維明周奎。『留京會茶期』見返しの記事によれば道可は九月十六日から十一月三日まで光源院に宿泊している。

毫摂寺		小濱	11/1	摂津国小浜庄（現在の宝塚市小浜）の真宗寺院である毫摂寺の住持。
河野大炊頭			9/22, 迎賓稿	河野通和。二条家諸大夫（『地下家伝』）。
衡梅和上			10/17	妙心寺塔頭衡梅院住持。
児嶋吉郎兵衛			11/2, 迎賓稿	未詳。
小西与右衛門		丹後	5/17 朝	丹後の廻船問屋。漢詩人小西伯熙としても知られる。水田紀久・堀川貴司解説『松江近体詩』（太平書屋、二〇〇三）参照。
駒井安藝		東寺坊官	11/2	東寺坊官、天保九年版『平安人物志』に「鍛刀」として見える「駒井慶任　号（笠百ママ）東寺田中町　駒井安藝」は同人あるいは後裔か。
駒井吉兵衛			10/5	未詳。
金地院大和尚		南禅也	5/24 貼紙下，迎賓稿	南禅寺塔頭金地院の僧。雪岡宗弼か。
金蓮寺		四条道場	10/19 貼紙下，10/29	京極通四条北に位置した時宗寺院。
坂倉周蔵		岸和田留守	10/12	文化八年刊『京羽二重大全』巻二に岸和田藩が姉小路烏丸東の京屋敷に置いた家来として「坂倉周蔵」の名あり。
坂本		御殿留監山門ニて	10/25	未詳。
前内大臣様			10/17 貼紙下	大炊御門家孝か。道可の書の師にあたる。
佐々木甲斐守		今宮神主	9/23 貼紙下，10/6	京の今宮社神主。
佐々木蔵人			9/22, 迎賓稿	文化十年版『平安人物志』儒家部掲載の「佐々木公明　字伯章号柳所塔之壇松之木町　佐々木内蔵人」と同人か。

讃岐や忠兵衛		倉本氏	10/21	未詳。大坂の商人か。
佐野栄庵		紹益之孫名家也	5/27, 10/11	京の富商。灰屋佐野紹益の孫。
三甫大和尚	金閣和尚	金閣兼帯・林光院	5/12, 迎賓稿	相国寺塔頭林光院及び鹿苑寺住持の三甫玄省。
慈照大和尚	慈照西堂・慈昭西堂	相国・号止源	5/10, 5/24, 10/3 菓子茶, 迎賓稿	相国寺塔頭慈照院住持で相国寺第百十四世の松源中奨。
七里九朴			迎賓稿	彦根藩の井伊掃部頭等の御用商人である七里彦次右衛門家の隠居か。文化八年版『京羽二重大全』巻二に「衣棚出水上／七里彦右衛門」、文久三年版『花洛羽津根』に「衣棚出水上／七里彦次右衛門」とあり。
品川内膳		さか	11/2	未詳。
島田與三右衛門		夷屋主人也	10/5	京を拠点とする豪商夷屋（恵比須屋）の三代島田与三右衛門房衆（文政七年没）。青山英正「恵比須屋島田八郎左衛門家の人々―『花彙』の編者島田充房を中心に」（『明星大学研究紀要人文学部・日本文化学科』二三号、二〇一五）参照。
清水六兵衛	六兵衛		5/11, 迎賓稿	陶工の初代清水六兵衛か。
清水六郎平		建仁寺町	5/17 貼紙下	陶工の初代清水六兵衛と同人か。
下妻少進		西本願寺	10/22	西本願寺坊官。大枝流芳の『雅遊漫録』（宝暦十三年刊）に「下妻少進は西本願寺坊官」とあり。（日本随筆大成第二期第二三巻三二一七頁）。
下村孫八郎		大丸や主人也	10/5	伏見の呉服商大丸屋の一族で、独立して糸問屋を営む。俳号春坡として几董及び蕪村門。下村をさむ著『春坡の資料と研究』（笠間書院、一九七八）参照。
周弁			5/29, 10/28	未詳。

守興和上			10/19 貼紙下，10/29	浄土僧。中島棕隠『錦西随筆』に「黒谷ノ隠僧守興和尚」とあり。伴蒿蹊と親交あり。
守拙坊			11/1	未詳。
準敬長老		善明院	9/29, 10/20	泉涌寺塔頭善明院住持か。
承寛坊		西さか・西嵯峨	10/28, 11/2 貼紙下	未詳。
聖光寺		寺町	10/21	京極通綾小路南に位置する浄土宗寺院の住持。
正受大和尚	正受和尚	同（大）・号龍渓・受正長老	5/11, 9/23 貼紙下，10/6, 迎賓稿	龍渓紹章。大徳寺塔頭正受院住持。大徳寺四〇二世。
常長老様			11/16	相国寺第百十三世梅荘顕常（号大典）。
真覚院家			10/25	未詳。延暦寺真覚院大僧都孝覚か（『国書人名辞典』参照）。
新州西堂	新州和尚		9/21, 迎賓稿	新州周鼎。東山慈照寺（銀閣寺）十四世住持。
萱谷中務卿		大仏大王坊官	5/16, 迎賓稿	妙法院宮坊官の萱谷寛常。『地下家伝』参照。
杉田伝六郎			9/23	未詳。
鈴木多門			10/25, 迎賓稿	三宅米吉『以文会筆記抄』（雄山閣、一九二九）八六頁に「大黒町鈴木多門家。代々医師、當多門七十七歳、健身、天和年中先祖買得以来重なる柱一品も不替、古来木性宜しき也。朽ち継ぎなく今に腐り少なし。」とあり。
鈴木知足菴	知足菴		5/16, 10/9, 迎賓稿	茶人。通称鈴木貢、出家して知足庵道覚と称した。和歌は小沢蘆庵門人。妙法院宮真仁法親王と交流あり。飯倉洋一「妙法院宮サロン」（高田衛編『秋成とその時代（論集近世文学五）』勉誠社、一九九四、所収）参照。

鈴木要人			5/26	未詳。	
諏訪九右衛門		矢倉・鍵や	9/25	未詳。	
諏訪嘉兵衛		松葉や	9/25	讃岐国高松藩松平家等の御用商人か（文久三年刊『花洛羽津根』）。	
晴実西堂		宇治橋寺・橋寺	9/29, 10/20	橋寺こと放生院住持か。	
清田大太郎			10/10 貼紙下	清田龍川。儒者。清田儋叟の養子。	
瀬尾元三郎		薩摩や	5/28	未詳。石川八朗「翻刻・「幕末期連歌人名録」」（『九州工業大学研究報告（人文社会科学）』第三〇号、一九八二）が紹介する宇佐市四日市の渡辺家（里村北家を継いだ綱峰等を出した）所蔵の人名録に「教延　京町人瀬尾元三郎」とある人と同人か。『都林泉名勝図絵』巻三の東福寺の挿絵に瀬尾教延の漢詩一首が載り、また天理大学附属天理図書館古義堂文庫の所蔵する「漢和聯句」（八九・一一）はこの教延主催の和漢連句の記録である。仁斎門で書肆でもあった瀬尾用拙斎の縁者か。小松茂美『平等院鳳凰堂色紙形の研究』（中央公論美術出版、一九七三）一五九頁が引く平等院浄土院所蔵の平等院鳳凰堂色紙形摸本のひとつである玉誉上人本の識語に「寛政十二年庚申夏閏四月上浣緣渓瀬尾教延謹誌」と署名あり。	
瀬尾元次郎			迎賓稿	未詳。瀬尾元三郎の誤記か。	
善蔵			5/23	未詳。	
善道寺和上			10/11 朝	未詳。	
泉涌法安寺首座	法安寺		9/29, 10/20	泉涌寺塔頭法安寺の僧。	

巣松西堂	巣松軒和上		9/21, 迎賓稿	高陽承隆。相国寺塔頭巣松軒住持。	
曾谷法三		小川下立売下所・小川下立売下ル西側	10/3, 11/8	徳島藩の御用商人曾谷又四郎の隠居か（天明四年版『京羽二重大全』巻二）。石塚寂翁『歌集』（大阪公立大学図書館森文庫蔵・九一一・一／KAS）に「天明三のとし神無月中の六日高雄山の紅葉みむとて公古宿禰曾谷法三なとすゝめたてていさない出る」「曾谷法三の主はとし比ほくゑ経の行者にてかねては出家の望有し本意とけて後猶も祖師の霊場を尋ねくらむと思ひ給へるを（以下略）」「曾谷法三坊世をのかれて松尾延慶庵の山上に閑居せしをとふらひて物語し侍るにことしは六十年満なるよしをきゝて」等とある。
大魄		雅隠師弟子	5/13	未詳。	
大渓上人		八幡・妙本寺	10/3	未詳。	
大廈和尚			迎賓稿	未詳。	
大中尊者			5/29	相国寺一一七世の大中周愚。あるいは建仁寺塔頭大中院住持か。	
高木猪八郎			5/25	未詳。吉田粛の本家である高木家の人物か。	
高崎一馬			9/22	未詳。	
竹内章庵			5/16朝	皆川淇園門人帳明和九年冬条に「播州赤穂尾崎邑／竹内章菴　惟孝／改名　荻玄隆　徒居播磨姫路／〈字　子政／年　十九歳〉〈紹介　久保信行／執事　淡輪秉〉」（『名家門人録集』臨川書店、一九八一、三四頁）とある人物か。	
武田伊助			5/25	未詳。	
竹田与一郎			10/13	未詳。	

竹や忠兵衛			5/23	京の茶道具商。宝暦十二年刊『京町鑑』に「茶湯道具舎並目利」として「押小路御幸町西竹屋忠兵衛」あり。
（多田）寛治			迎賓稿	未詳。
多田五郎右衛門			迎賓稿	未詳。
橘七郎右衛門	たち花	四条	5/9, 11/3, 11/8, 11/20, 11/24, 迎賓稿	橘秦。『筆のすさび』の著あり。『留京會茶期』見返しに、九月十六日に京に着いた道可が最初に訪れた「橘子」もこの人物であろう。
田中庄兵衛			10/15	京の書肆か。「寺町通松原下ル町／田中庄兵衛」（香月牛山『巻懐食鏡』寛政二年再刻本刊記）。
田中典膳			10/19	日野家雑掌。
田並呉明			10/23	未詳。
団藤兵衛		千切や	5/17, 迎賓稿	京の法衣業千切屋一門。
茶屋久右衛門			9/23	未詳。文久三年刊『花洛羽津根』に旅籠屋として「三条東橋詰　茶屋久右衛門」が見えるものの関係未詳。
中嵜和上		長遠寺	9/26, 9/29	未詳。相国寺派の長遠寺住持か。
聽松大和尚	聽松大和上・聽松和尚	南禅	5/10 貼紙下, 5/24, 5/24 貼紙下, 10/3 菓子茶, 迎賓稿	南禅寺聽松院住持。
長得西堂			6/2	汶川慧汶。相国寺塔頭長得院住持。
辻之倉九兵衛			5/16 朝	未詳。

津田到外			9/27	迎賓稿	津幡泰古。二条家諸大夫（『地下家伝』）。	未詳。
津幡民部少輔						
寺井善右衛門		三条菱や	5/16 貼紙下，5/20，迎賓稿		手島堵庵の門弟で寛政三年刊『案山子草』の著者寺井方信（通称菱屋善右衛門、寛政元年没）の息か。
天真和尚		江府号東陽	5/11		江戸麻布天真寺第十一代東陽宗晃。松平不昧と親交あり。
東溟長老			9/23 貼紙下		大徳寺塔頭碧玉庵七世東溟宗深か。白嵩顕成『藤村庸軒をめぐる人々』（思文閣出版、二〇一一）三九三頁参照。
とくらや与兵衛			9/28		大坂の両替商都倉屋与兵衛。
外山様			10/19		外山光実。公家。
長井義庵		京や町観世上町	5/22，迎賓稿		未詳。
那波二郎左衛門	那波次郎左衛門		5/29, 10/10，迎賓稿		未詳。京の豪商である那波家の一統か。
櫛林　族		同（堀川中立売下）	10/4		京都の蘭方医の櫛林家の縁者か。
南昌大和尚		東福	5/24		東福寺塔頭南昌院住持。熙陽龍育あるいは龍河玄禎か。
錦小路様			5/21, 11/24，迎賓稿		錦小路頼尚。公家。

西田作兵衛			10/11 朝	未詳。田中一松「一休和尚並森盲女図」（『國華』第六九七号、一九五〇）によれば正木美術館現蔵の同図の箱書のひとつに「釈惠乗尼、寛政十戊午年九月二日卒、為冥福其子浪華道修町一丁目西田作兵衛寄附、享和元辛酉四月七日、酬恩菴常住」とあり、また加藤正俊「関山慧玄の東遊について」（『禅文化研究所』第二四号、一九九八）によれば天保九年に関山慧玄の手跡を大徳寺に寄進した人物として「西田作兵衛」の名が見える。同人か。
西村樑斎	下立売常陸屋隠居		5/19, 11/14, 迎賓稿	裏千家の茶人。下立売西洞院に住し、常陸と称す。山田哲也「天神さんと一燈宗室茶会―西村樑斎他会記より」（千宗室監修『裏千家今日庵歴代八巻又玄斎一燈』淡交社、二〇〇八、所収）参照。
塗師宗哲			9/25	京の塗師五代中村宗哲。「武者小路新町西へ入　塗師宗哲」（文化八年刊『京羽二重大全』）。宮内庁書陵部に蔵される「釜風炉楽焼蒔絵師系図並雑考」と題した鷹司家旧蔵の雑綴の中に文久元年に塗師宗哲が歴代について記した文書があり、当該文書に「五世　豹斎宗哲／漆畝卜号／文化八未年七月十六日卒」とある。
野路井刑部卿	宮様坊官		10/28, 11/2 貼紙下	嵯峨大覚寺宮坊官の野路井盛賢（『地下家伝』）。
野瀬善兵衛			10/10	井口海仙「利休居士二百年忌扣／不見齋玄室」（『茶道月報』第三五六号、一九四〇、所収）によれば不見斎石翁が寛政元年に催した利休二百年遠忌の茶会の十一月十日の出席者に「野瀬善兵衛」の名が見える。
野村藤右衛門	千切や		5/17, 迎賓稿	未詳。千切屋一門か。
伯部周了		伯部	5/21, 迎賓稿	未詳。
端長兵衛	雲州御用達		10/27	出雲国松江藩御用商人。「用達中立売西洞院東へ入　端長兵衛」（天明四年版『京羽二重大全』巻二）、「中立売新町西入／用達　端長兵衛」（文久三年版『花洛羽津根』）。茶師の上林三入の誤記か。だとすれば第八代忠栄の時代となる（宇治市歴史資料館『上林三入家文書』解説参照）。
端林三入			10/27	橋本経亮。非蔵人。梅宮社祀官にして和学者。
橋本肥後守			5/18, 迎賓稿	

畑源太郎		雲州御留守居之令郎也	10/13	未詳。十月二十七日に来訪した出雲国松江藩留守居と目される畑六郎左衛門の息か。
畑民部			10/13	京住の儒医畑鶴山（名維龍）か。
畑柳敬法眼			11/1	京の医師畑惟亮（天明二年版『平安人物志』等）。
畑六郎左衛門		雲州御留守居	10/27	未詳。出雲国松江藩京屋敷留守居か。十月三日来訪の畑源太郎の父か。
速水宗達			5/19, 迎賓稿	茶人。速水流の祖。中野稽雪『小沢蘆庵　里のとぼそ』第一集（蘆庵文庫、一九五一）「小沢翁門人録」に「宗達。速水氏。茶人」とあり。
蕃蒿渓			5/29	伴蒿蹊。近江生まれの商人。芸文家。
般若和尚		東山	5/10	未詳。
比喜多卯作			11/2	未詳。中野稽雪『小沢蘆庵　里のとぼそ』第一集（蘆庵文庫、一九五一）の「小沢翁門人録」に「盛澄。比喜多卯作また丹太郎。阿波徳島藩士。」とあるが、橋本経亮『橘窓自語』に「比喜田盛澄〔割註〕西洞院下立売大文字屋権兵衛」（日本随筆大成第一期第四巻四三五頁）とあることから比喜多卯作は蘆庵門の比喜多盛澄とは別人と見るべきか。なお疋田権兵衛は天明四年版『京羽二重大全』巻二に阿波国徳島藩松平阿波守の御用商人として「用達西洞院下立売下ル　比企田権兵衛」とあり。
疋田元達	比喜多元達		5/14, 5/22, 11/5, 11/24, 迎賓稿	比喜多元達。庸軒流茶人。
疋田角之丞			9/28	未詳。
樋口源左衛門		在坂	迎賓稿	武蔵国河越藩京屋敷留守居。蕪村門の俳人道立としても知られる。注記からこの時期には大坂住か。
樋口三位様	樋口様		5/21, 11/17, 迎賓稿	樋口宣康。公家。

久田宗参			5/16 朝, 11/20	茶人。両替町久田家六世。
人見九郎右衛門		□吉之舍兄也	5/28	手島堵庵門の人見正入か。石川謙『石門心学史の研究』(岩波書店、一九四二) 四〇三頁に寛政期頃の主要な舍中の人物として「人見正入　通称菱屋九郎兵衛寛政十年十二月歿」とあって通称が微妙に異なるが、同書四二一頁に掲げられた波部光孚が人見正入と吉田定誓に寛政六年二月五日付で宛てた書状図版に見える宛名書は「人見九郎右衛門」。
広沢宗真			10/26	未詳。広沢仁左衛門家の隠居ないし縁者か。
広沢仁左衛門			5/23, 11/3, 11/9, 迎賓稿	姫路酒井家など諸大名の御用商人。屋号は二文字屋。(『史料京都の歴史』第七巻一一一頁参照)。速水宗達と門人達との金銭授受記録東北大学附属図書館蔵『享和元年酉三月社中年寄仕分覚』に名あり(畑中香名子「茶の湯における七事式の研究―速水宗達を中心に―」(京都芸術大学学位論文 https://kyoto-art.repo.nii.ac.jp/records/374) 参照)。
広瀬庄兵衛			5/20	未詳。
福島甚兵衛			10/21	未詳。
藤井市郎次		東洞院嶋や	5/16 貼紙下, 5/20, 11/10, 迎賓稿	京の商家か。寛政二年五月から翌年にかけて九度蒹葭堂を来訪(『蒹葭堂日記』)。本居宣長『享和元年上京日記』五月二十一日条「東洞院四条上ル町／嶋屋市郎兵衛　入来　出席」(筑摩書房版『本居宣長全集』第十六巻六五〇頁)、石塚竜麿『鈴屋大人都日記』五月二十二日条「東洞院嶋屋の某かうせちきにきたりぬ」(筑摩書房版『本居宣長全集』第二十三巻一五二頁)。同人ないし同族か。
藤井宗就			迎賓稿	未詳。
藤江喜右衛門	笹や喜右衛門	京や町観世上町	5/22, 迎賓稿	未詳。文久三年版『花洛羽津根』に京羽二重の仲買として「同(大宮・引用者注)五辻下　笹屋喜右衛門」とあるが関係あるか。
富士谷千右衛門			10/3	京の国学者富士谷御杖。

藤田彦太郎			10/15	未詳。『日本現今人名辞典』（日本現今人名辞典発行所、一九〇〇）に丹波国多紀郡古市村（現在の丹波篠山市の一部）の大地主で古市銀行副頭取等を努めた「藤田彦太郎」なる人物が立項されているが後裔か。
碧玉大和尚	碧玉和上・碧玉和尚	大・号瑞巌	5/11, 10/6, 迎賓稿	大徳寺塔頭碧玉庵六世瑞巌宗頊。大徳寺三九六世。白嵩顕成『藤村庸軒をめぐる人々』（思文閣出版、二〇一一）三九三頁参照。
法眼東洋			10/21	絵師の東東洋。
細合半斎			9/25	大坂住の漢詩人・書家。
細辻伊七			5/23	『寛政乙卯夏五月東山茶燕迎賓稿』に見える「永楽屋伊兵衛」こと京の木綿商細辻伊兵衛の誤記ないし同家隠居か。
本咲理右衛門		尼崎	10/17	未詳。尼崎藩の掛屋であった泉屋本咲利兵衛の縁者か。
松井和泉		南都	5/9, 迎賓稿	古梅園八世松井和泉掾元孝。
馬野仙や		堀川中立売下	10/4	未詳。
丸山荊山		菊亭様御用人隠居	10/2, 10/13 貼紙下	未詳。「菊亭様」は公家の今出川家。
三浦七左衛門		姫路御留守居	10/27	播磨国姫路藩京屋敷留守居か。
三上伝左衛門		平野	10/17	三上正明。摂津国平野郷の名主三上家の縁者か。石川八朗「翻刻・『〈幕末期連歌人名録〉』」（『九州工業大学研究報告（人文社会科学）』第三〇号、一九八二）が紹介する宇佐市四日市の渡辺家（里村北家を継いだ綱峰等を出した）所蔵の人名録に「正明　摂州平野郷三上伝左衛門」とあり。
水谷衛門尉		瀧口官人	10/4	地下官人（瀧口）の水谷政直。『地下家伝』参照。

三宅近江			5/19 貼紙下，5/20，迎賓稿	京の冠師・装束師三宅近江守。宝暦十二年刊『京町鑑』烏帽子町条に「此町東側に御装束師三宅近江守居宅有」とあり。
薬樹院			10/25	近江国大津にある延暦寺の里坊か。
谷野土佐守			9/27	谷野常喜。知恩院宮諸大夫。本居宣長『享和元年上京日記』五月二十四日条「谷野土佐守〈同（知恩院・引用者注）宮諸大夫〉入来」（筑摩書房版『本居宣長全集』第十六巻六五一頁）。
藪沢清記		同（大仏大王）御用人・改姓坂元	5/16	妙法院宮御用人。
山崎不騫		泉州隠士	10/4	未詳。
山中黙斎子		岡崎	5/10，迎賓稿	未詳。
山田亀斎			5/29	山田蘭斎。大坂住の茶人。
山邊内記			10/20	尾張国海部郡新田の豪族で、田中訥言とも交流があった京住の服部喜暉か。山田秋衛『田中訥言』（一九三八）に「常に京に出で、名家と交り、遂に家を弟政祐に譲り、名を山辺内記と改めて晩年を京都に送つた」（二二一～二二二頁）とあり。
山本駿河守			10/24	大炊御門家諸大夫の山本昌敷（『地下家伝』）。
山本弥次郎		いせや	10/15	未詳。
湯浅三蔵			10/18	香川景樹門の湯浅輝慶か。観尊編『たち花の香』（弘化四年刊）に「湯浅三蔵　輝慶」とあり。
横山九兵衛			5/17	未詳。

横山友甫			11/2	未詳。
横山柳珉		畑医学堂御門人	10/13	京の医師。畑柳安門。柳安とともに安永五年及び寛政八年に松江藩主松平治郷の治療を行う。松平家編輯部『松平不昧伝』（箒文社、一九一七）参照。
吉田喜五郎			5/25	呉田吉田家の分家。
吉田喜平治			5/25	呉田吉田家当主吉田粛。道可の養子。
吉益掃部			5/23, 迎賓稿	医師で大坂吉益家当主の吉益巌斎。吉益東洞三男。
世継八郎兵衛		岐阜や	5/12, 迎賓稿	京の豪商で芸文家の世継寂窓
六如上人		御病僧有之御不参人情ハ細白不為隔	5/29, 10/10朝	天台宗の詩僧六如慈周。
両足大和上			6/2	建仁寺塔頭両足院住持。
了蓮寺		四条	10/19貼紙下, 10/29	京極通錦小路に存した浄土宗寺院の住持。明治期に知恩寺境内へ移転。
冷香大和上	冷香和尚		6/2, 10/10朝, 迎賓稿	古道元式。相国寺塔頭冷香軒住持。

【附記】本研究はJSPS科研費23H00603の助成を受けたものである。